



母音長受入の非対称性と Alignment 制約 : 最適性理論にもとづくイタリア語由来の借用語の分析

田中, 真一

(Citation)

神戸言語学論叢, 11:75-86

(Issue Date)

2018-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010272>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010272>



母音長受け入れの非対称性と Alignment 制約 —最適性理論にもとづくイタリア語由来の借用語の分析—

田中 真一

神戸大学

1. はじめに

借用語適応 (loanword adaptation) において、借用元言語 (donor language: L2) の音韻構造の保持に関わる忠実性制約 (faithfulness constraint) と、借用先言語 (host language: L1) の無標の音韻構造の実現に関わる有標性制約 (markedness constraint) との相対的な関係が問題となる (Kager 1999)。本研究では、イタリア語の長母音が日本語に借用される際に、入力長母音のまま受け入れられる場合と、短母音として受け入れられる場合があることを報告し、そのような非対称性が、日本語側 (L1) の借用語アクセント規則の要請によって生じることを、記述・理論両面から論じる。

日本語の借用語音韻論を扱った研究は、入力言語 (L2) として英語が大半を占め、それ以外の言語を扱った研究は、相対的に少ない。英語以外の言語を扱った研究として、フランス語 (Shinohara 2004) やドイツ語 (Dohls 2005) などとともに、イタリア語から日本語への借用語について複数扱われているが (田中 2007, Tanaka 2017, Ooigawa 2014, Morimoto 2015, etc.), それらのほとんどにおいて二重子音 (促音) の分析に焦点が当てられ、それ以外の要素については十分に検討されて来なかった。このような背景のもと、田中 (2016, 2017) は、イタリア語から日本語に借用された語における母音長受け入れを分析し、そこに日本語の借用語アクセント規則に起因した位置の非対称性が観察されることを報告した。

本稿は、そこで未解決であった問題を提示し考察するとともに、非対称性の生じるメカニズムについて新たに理論的な説明を試みる。具体的には、最適性理論 (Prince & Smolensky 1993/2004) の枠組みにより、母音長の受け入れとアクセントの計算を同時に行うシステムを提示する。

次節で、本稿の分析に関係するイタリア語の音韻構造および問題の所在を述べ、続く第 3 節では、田中 (2016, 2017) で示された記述的一般化の要点と課題を提示する。第 4 節では課題に対する記述的な説明を試み、第 5 節では母音長受け入れの非対称性とアクセントの計算を同時に最適性理論の枠組みにより分析する。最後に、考察、まとめと残された課題について述べる。

2. イタリア語の強勢と音節構造：問題の所在

イタリア語は、子音長の音韻的対立を持つのに対し、母音長の音韻的対立は持たないことが知られている。長母音は語末以外の強勢開音節においてのみ生起する (Marotta 1985, Canepari 1992)。強勢位置として、次語末音節をデフォルトとし約 8 割がその位置に置かれ、語末 3 音節目への強勢と語末強勢がそれに続き、語末 4 音節目への強勢がごく僅かに生起するとの報告がある (Borrelli 2002)。次語末音節が尾子音を伴う閉音節、すなわち重音節の場合、(1) のように例外なくその音節に強勢が置かれ、母音は短母音として生起する (Krämer 2009)。(1a) は尾子音と後続音節の頭子音とが異なる子音連続の例であり、(1b) は両者が二重子音 (geminate consonants) を形成する例である。なお、例として便宜上、日本語に借用された語を挙げている (・は音節境界、母音上の記号は強勢、' はアクセントをそれぞれ表す)。

(1)	イタリア語発音	語例	借用語
a.	[san.már.ko]	San Marco	サンマ'ルコ
	[vi.vál.di]	Vivaldi	ヴィヴァ'ルディ
	[skám.pi]	scampi	スカ'ンピ
	[vér.di]	Verdi	ヴェ'ルディ
b.	[dʒo.ván.ni]	Giovanni	ジョヴァ'ンニ
	[spa.gét.ti]	spaghetti	スパゲ'ッティ
	[kar.pát.tʃo]	carpaccio	カルパ'ッチョ
	[skar.lát.ti]	Scarlatti	スカルラ'ッティ

イタリア語は開音節性が高く、とくに語末は例に見られるように、開音節性が非常に高い。

(1) 以外の音節構造、すなわち、次語末が開音節の場合、強勢位置の予測はやや困難となるが、語末を除く強勢開音節内の母音は (2) のように義務的に伸張し、長母音として生起し、重音節を形成する (Marotta 1985, Canepari 1992, Krämer 2009)。

(2)	イタリア語発音	語例	借用語
a.	[ve.ró:.na]	Verona	ヴェロ'ーナ
	[kan.tá:.ta]	cantata	カンタ'ータ
	[a.mó:.re]	amore	アモ'ーレ
	[put.fí:.ni]	Puccini	プッチ'ーニ
b.	[pá:.do.va]	Padova	パドヴァ (*パ'ードヴァ、*パド'ーヴァ)
	[ó:.pe.ra]	opera	オ'ペラ (*オ'ーペラ、*オペ'ーラ)

[bal.sá:.mi.ko]	balsamico	バルサ'ミコ (*バルサ'ーミコ、*バルサミ'ーコ)
[ba.zí:.li.ko]	basilico	バジ'リコ (*バジ'ーリコ、*バジリ'ーコ)

(2) のイタリア語と借用語における母音長を比べると、イタリア語で長母音の生起する環境において、日本語化の際、それが (2a) のようにそのまま長母音として実現される型と、(2b) のようにそれが実現されず短母音として生起する型の両方が観察される。田中 (2016, 2017) は、このような非対称性が、日本語 (L1) の借用語アクセント規則の関与によって生じることを記述的に説明した。

3. 田中 (2016, 2017)

田中 (2016, 2017) は、『広辞苑』(第5版)、『コンサイス・カタカナ語辞典』(第2版)、『大辞林』(第2版) より、イタリア語から日本語に借用された 1,001 語を抽出し、各語の語末 3 音節内に生起する 2,795 母音を対象とした、原語と借用語間における母音長と音韻構造との対応を分析した。おもな主張は (3) の通りである。

- (3) a. イタリア語から日本語に入った借用語の長母音は、ほぼすべてが原語の長母音に由来する。短母音が長母音として借用されることはほぼない。
- b. 長母音がすべて受け入れられるわけではない。そこには生起位置が関係し、日本語化の際、次語末では長母音がそのまま受け入れやすいのに対し、語末 3 音節目ではむしろ短母音として受け入れられやすい。
- c. 上記の非対称性には、受け入れ側 (日本語) の借用語アクセント規則が関与する。

日本語 (東京方言) の音節にもとづく借用語アクセント規則として、以下が知られている。

(4) 日本語 (東京方言) 借用語アクセント規則 (Kubozono 1996)

次語末重音節にアクセントを置く。そこが軽音節の場合、もう一つ前の音節 (語末 3 音節目) にアクセントを置く。

- (5) a. ① オリン.ピ'ック、ピ.ラ.ミ'ッド、カ.レ'ン.ダー、パー.テ'ン.ダー
 ② チョ.コ.レ'ー.ト、ア.リ.ゲ'ー.ター、ト.レ'ー.ド、コ.レ.ス.テ.ロ'ール
 ③ アル.バ'イ.ト、ク.ロ.コ.ダ'イル、プ.ラ'イ.ム、ス.ト.ラ'イ.ク
- b. ク'.ラ.ス、ア.ス.ベ'.スト、ク.リス'.マ.ス、ガ.ラ.パ'.ゴ.ス、エ.ネ'.ル.ギー

イタリア語が日本語に借用される際、(2a) (たとえば「ヴェロ'ーナ」) は (5a ②) に、

また (2b) (たとえば「パドヴァ」) は (5b) の音韻構造と対応することになる。田中 (2016, 2017) は、(2a) において長母音がそのまま受け入れられるのに対し (2b) においてそれが受け入れられないのは、(2a) の位置においてはアクセント規則により、そこが義務的に重音節でなければならないのに対し、(2b) ではその必要がないためと説明した。

(6)	a. 長母音	b. 短母音
[ve. ró:.na]	ヴェ,ロ'ー,ナ	*ヴェ,ロ',ナ
[a.mó:.re]	ア,モ'ー,レ	*ア,モ',レ
[stak.ká:.to]	ス,タッ,カ'ー,ト	*ス,タッ,カ',ト
[ka.rí:.na]	カ,リ'ー,ナ	*カ,リ',ナ

(7)	a. 長母音	b. 短母音
[pá:.do.va]	*パ'ー,ド,ヴァ	パ',ド,ヴァ
[ná:.po.li]	*ナ'ー,ポ,リ	ナ',ポ,リ
[lí:.be.ro]	*リ'ー,ベ,ロ	リ',ベ,ロ
[ba.zí:.li.ko]	*バ,ジ'ー,リ,コ	バ,ジ',リ,コ

仮に次語末開音節が軽音節（短母音）として受け入れられた場合、(6b) のように、借用語アクセント規則 (4) との間に齟齬を来すことになる。次語末位置の音節において、長母音としての受け入れは、(5a) を満たすという音節量の面で必須というわけである。

しかしながら、(7a) の型については、借用語アクセント規則に抵触するわけではないにもかかわらずなぜ禁止されるのかという疑問が生じる。前述の通り、アクセント規則では、次語末が軽音節の場合、語末 3 音節目の音節量は問題にならない（重くても軽くても、自動的にその位置にアクセントが置かれる）。

本稿では、最適性理論 (OT) の枠組みから、上記の非対称性の生じる要因として Alignment 制約（語末から可能な限り近い位置にアクセントを置くという制約）が関与することを提示する。

4. 母音長の非対称性と生起位置

4.1. データ分析

下表は、日本語に借用された際の語末 3 音節内における、原語（イタリア語）の開閉音節の別、強勢有無の別、12 条件 (3×2×2) に対する、日本語の長母音生起率および数を示したものである。第 2 節で確認したように、このうち、語末以外の強勢開音節（表中**太枠内**）が、イタリア語における長母音の生起環境に対応し、日本語化の際の長母音受け入れ率・数となる。

表. イタリア語の開／閉音節、強勢有無と日本語の長母音生起率

音節の種類\位置	① -3 音節	②次語末 (-2)	③語末 (-1)	合計
a. +開音節, +強勢	28% (21/75)	64% (323/508)	9% (1/11) ¹	58% (345/594)
b. +開音節, -強勢	0% (0/430)	2% (3/63)	1% (12/983) ²	1% (15/1476)
c. -開音節, +強勢	0% (0/25)	2% (7/405)	0% (0/1)	2% (7/431)
d. -開音節, -強勢	0% (0/291)	---- (----)	0% (0/3)	0% (0/294)
合計	3% (21/821)	34% (333/976)	1%(13/998)	13%(367/2795)

前節において確認したように、長母音の生起する借用語の大半が、太枠内、つまりイタリア語において長母音の生起する音韻構造に由来する（94%: 344/367）。さらに注意深く観察すると、長母音の生起は借用語の次語末に集中し、日本語の全長母音のうち 9 割近く（88%: 323/367）を占める。これは日本語話者のイタリア語由来借用語のデフォルト意識と一致するものと思われる。同時に、イタリア語の長母音すべてが日本語に受け入れられるわけではないことも確認できる。長母音受け入れ率（太枠内平均値）は 6 割弱（59% : 344/583）である。

さらに重要な点として、前節までで確認したように、長母音受け入れには日本語側の位置の非対称が観察され、次語末音節と語末 3 音節目とで、デフォルト値の異なることが分かる。借用語の次語末に位置した長母音は、高い割合でそのまま長母音として受け入れられる（64%: 323/508）のに対し、語末から 3 つ目に位置した場合、それが長母音としてではなく短母音として借用される型がデフォルトになる。

同時に、少数であるものの、上記デフォルト値と異なる例も一定数生起していることも確認できる。以下では、このような例外的なパターンの大部分が説明可能であることを示しながら、上記の各デフォルト値の妥当性を再確認し、非対称性の生じるメカニズムを考察する。

4.2. 母音長受け入れの例外（その 1）：ピッツェ’ リアとクレモナ⁰

前節の表における例外のうち、まず、借用語の次語末位置において原語長母音が短母音として受け入れられる要因を分析する。

表中 (a②) において長母音が受け入れられない例の大半については、一定の説明が可能である。一つは原語の語末が [i:.a] をはじめとする（上昇）母音連続であり、その前半の強勢長母音が短母音として受け入れられた例が挙げられる（その結果、原語とアクセント母音が異なることになる）。

母音長受け入れの非対称性と Alignment 制約
—最適性理論にもとづくイタリア語由来の借用語の分析—

(8) [pit.tse.rí:.a]	pizzeria	ピツ.ツェ'.リ.ア
[trat.to.rí:.a]	trattoria	ト.ラッ.ト'.リ.ア
[fan.ta.zí:.a]	fantasia	ファン.タ'.ジ.ア
[san.ta.lu.ʃí:.a]	Santa Lucia	サン.タル.ル'.チ.ア
[al.fa.ro.mé:.o]	Alfa Romeo	ア.ル.ファ.ロ'.メ.オ

もう一つは、借用語の次語末に位置する長母音を受け入れないことにより、日本語の平板アクセントの生起条件 (① 4 モーラ、② 語末が軽音節の連続 (-LL#)、③ 語末が非挿入母音) を同時に満たすといった、(9) の操作が加えられたものである。

(9) [kre.mó:.na]	Cremona	ク.レ.モ.ナ ⁰
[o.ka.rí:.na]	ocarina	オ.カ.リ.ナ ⁰
[ka.za.nó:.va]	Casanova	カ.ザ.ノ.ヴァ ⁰
[so.prá:.no]	soprano	ソ.ブ.ラ.ノ ⁰
[mak.ke.ró:.ni]	maccheroni	マ.カ.ロ.ニ ⁰

なお、先述の通り、イタリア語の語末は開音節性が高く、非挿入母音の可能性が高いため、上記③は自動的に満たされる確率が高い。

4.3. 母音長受け入れの例外 (その2) : コ'ーモドとシ'ーミレ

次に、借用語の語末3音節目に位置する母音 (原語では長母音) がデフォルトの短母音ではなく、長母音として生起する例を確認する。これらの例に共通する特徴として、同時に (10) のように、短母音で借用された語形も並存することが挙げられる。

(10) [kó:.mo.do]	comodo	コ'ー.モ.ド	～	コ'.モ.ド
[sí:.mi.le]	simile	シ'ー.ミ.レ	～	シ'.ミ.レ
[né:.gri]	Negri	ネ'ー.グ.リ	～	ネ'.グ.リ
[a.dá:.ʒo]	adagio	ア.ダ'ー.ジ.オ	～	ア.ダ'.ジ.オ

興味深い点として、借用語語末3音節目に長母音のみが登録されている例について、(11) のようにそれらを短母音化させても違和感のないものが大半であるのに対し、そこがデフォルトの短母音のみ登録されている語を (12) のように長母音化させると違和感の生じるものが大半となる ((2b), (7a) のデータとも共通する)。³

(11) 登録された語形	(辞書非登録の) 短母音形
ファンタジースタ	ファンタジ'スタ

カンパ'ニア	カンパ'ニア
オペラセ'リア	オペラセ'リア
クアジ'モド	クアジ'モド
アマ'ビレ	アマ'ビレ
ピアチェ'ヴォレ	ピアチェ'ヴォレ
カンタ'ビレ	カンタ'ビレ

(12) パ'ドヴァ	??パ'ードヴァ
フ'イガロ	??フイ'ーガロ
バルサ'ミコ	??バルサ'ーミコ
バジ'リコ	??バジ'ーリコ

以上の生起分布は、語末 3 音節目における母音長のデフォルト値が短母音であることを示唆していると解釈できる。

さらに、これまで論じてきたことから確認できるように、(11) の短母音型は、次語末音節の短母音型 (13) (= (6b)) よりもはるかに容認度が高い。

(13) ヴェロ'ーナ	??ヴェロナ
ロマ'ーノ	??ロマノ
レガ'ート	??レガト
トスカニ'ーニ	??トスカニニ
パニ'ーニ	??パニニ

このように、借用語の次語末において、原語の長母音を短母音として受け入れるのは困難であるのに対し、語末 3 音節目においてはむしろ短母音として受け入れるのがデフォルトであることが確認できる。長母音の受け入れには、日本語の借用語アクセント規則に基づく位置の非対称性が関与することが改めて確認された。以下では、このような非対称性の生じるメカニズムについて、最適性理論 (OT) の枠組みから説明を試みる。

5. 最適性理論

(14) の制約群と (15) のランキングを設定する。

(14) 有標性制約

- a. NonFin (Ft): 音韻語の主要部 (アクセント) は末尾 (フット) に置かれない。

母音長受け入れの非対称性と Alignment 制約
—最適性理論にもとづくイタリア語由来の借用語の分析—

- b. FtBin: フットはモーラまたは音節のレベルで二項から成らねばならない。
 - c. Align-R (Ft, PrWd): フット (Ft) の右端を音韻語 (PrWd) の右端に揃える。
- 忠実性制約
- d. DEP-μ: 入力に存在しない要素 (モーラ) を挿入してはならない。
 - e. MAX-μ: 入力に存在する要素 (モーラ) を削除してはならない。

(15) ランキング : NonFin (Ft) >> FtBin >> DEP-μ >> Align-R (Ft, PrWd) >> MAX-μ

ここで重要な点として、入力の情報として強勢は直接参照せず、(原語強勢にもとづいた) 母音長のみを参照するということが挙げられる。以下では、母音長受け入れとアクセント付与とを同時に同じ制約・ランキングにより説明する。(16) は借用語の次語末に原語長母音の位置する例であり、(17) は語末3 音節目にその位置する例である。また、(18) において、原語がすべて開音節短母音の例 (語末開音節に強勢のある語) を示し、入力に母音長短の別の関与しない例における借用語の母音受け入れとアクセント付与について説明する。

(16) [vero:na] Verona → ヴェロ'ーナ

ve.ro:.na	NonFin(Ft)	FtBin	DEP-μ	Align-R (Ft, PrWd)	MAX-μ
☞ a. ヴェ.(ロ'ー.)ナ				*	
b. (ヴェ'.ロ.)ナ ⁴				*	*!
c. (ヴェ'ー.)ロ.ナ			*!	**	*
d. ヴェ.(ロ'.)ナ		*!		*	*
e. ヴェー.(ロ'ー.)ナ			*!	*	
f. ヴェ.(ロ'.ナ)	*!				*

(17) [pa:do.va] Padova → パ'ドヴァ

pa:.do.va	NonFin(Ft)	FtBin	DEP-μ	Align-R (Ft, PrWd)	MAX-μ
a. パ̌.(ド'ー.)ヴァ			*!	*	*
☞ b. (パ'.ド.)ヴァ				*	*
c. (パ'ー.)ド.ヴァ				**!	
d. パ̌.(ド'.)ヴァ		*!		*	*
e. パ̌.(ド'.ヴァ)	*!				*
f. (パ̌'.)ド.ヴァ		*!		**	

(18) [u.ni.ta] Unità → ウ'ニタ

u.ni.ta	NonFin(Ft)	FtBin	DEP-μ	Align-R (Ft,PrWd)	MAX-μ
a. ウ.(ニ'ー.)タ			*!	*	
☞ b. (ウ'.ニ.)タ				*	
c. (ウ'ー.)ニ.タ			*!	**	
d. ウ.(ニ'.)タ		*!		*	
e. ウ(ニ'.タ)	*!				
f. ウ(ニ.タ')	*!				
g. ウ.ニ.(タ'ー)	*!		*		
h. (ウ'.)ニ.タ		*!		**	

(14) の制約群、および、(15) のランキングは、前節までで確認した記述的一般化の内容を端的に表現している。

(16) では、次語末位置で原語長母音を受け入れることで、入力の子音長を保持すると同時に、長母音により 2 モーラフットを（語末を除く）最も右側に置くことができる。それに対し、(17) では、借用語語末 3 音節目の長母音を受け入れないことで 2 モーラフットを可能な限り右側に置く (17b) の型が最適となり、もう一方の、それを受け入れることでフットが語末から離れる (17c) の候補は不適格となる。母音長がフット形成さらに、その語中における位置と関係し、借用語アクセント規則の一部として作用していることになる。

(18) のようにイタリア語において語末開音節に強勢の置かれる語については、入力情報として語中のどの位置にも長母音が生起しないので、日本語においても短母音を基準として最適なフットが形成され、同時に、アクセントが決定される。同様の理由から、(17) の Padova は、(17a) の「*パド'ーヴァ」のようにではなく、(16a) の「ヴェロ'ーナ」(Verona) とは対照的なふるまいを見せる。入力における長母音の有無も関係し、DEP-μ（入力の短母音を長母音にしてはならない）が効力を発揮しているといえる。

以上、分析したように、借用語の位置による長母音受け入れの非対称性は、Align-R (Ft, PrWd)（できるだけ語末付近にフット／アクセントを置く）という制約と、MAX-μ（入力の長母音を保持する）という制約との関係、具体的には、前者が後者の上位に置かれること、さらには、借用語アクセント規則一般を説明する制約群により、一貫した説明が与えられるわけである。

6. 考察とまとめ

上記の制約とランキングにより、母音長受け入れの非対称性とアクセント付与とが同時に説明可能であることを示した。このようなランキングは、イタリア語からの借用語を説明するためだけのものではない。

田中 (2008) は、借用語一般のアクセントについて、(14) の制約群のうち、有標性制約 (14 a~c) のみを用いて (15) と同様のランキングによって分析している。そのような意味で、本稿で扱ったイタリア語の由来の借用語の分析は、記述的一般化も示す通り、借用語アクセント規則一般と関係する、一貫性のあるものと解釈できる。イタリア語の母音長受け入れは、借用語アクセント規則に關係する制約群に加え、二つの忠実性制約を想定すること、具体的には、借用語アクセント規則一般を説明する Align-R (Ft, PrWd) 制約の上位に DEP- μ を、下位に MAX- μ を置くことにより説明可能である。このことを母音長受け入れとの関わりから再解釈すると、入力 of 短母音を長母音にしてはならない (DEP- μ) という要請が、アクセント (フット) を語末に近づける (Align-R (Ft, PrWd)) より優先的に作用し、かつ、入力 of 長母音を短母音にしてはならない (MAX- μ) という制約が、Align-R (Ft, PrWd) より下位に置かれる、つまり、より違反可能ということになる。このように、母音長とアクセント位置の計算が相互に關係しながら処理の行われていることが確認できる。⁵

上記の長母音受け入れと原語強勢・受け入れ言語の音韻構造との關係は、二重子音の受け入れとも平行性がある。イタリア語の二重子音は、(デフォルト強勢の置かれる) 次語末音節においてもっとも日本語に受け入れられやすく、とくに、日本語において通常許容されない二重流音 /ll/, /rr/ も、相対的に高い割合で受け入れられる ((19b) は、語末から離れた音節において二重子音が受け入れられない例である) (Tanaka 2017) 。

- | | | | |
|---------|------------------|-------------|------------------------|
| (19) a. | [taʎ.ʎa.tél.le] | tagliatelle | タ.リ.ア.テ'ッ.レ |
| | [vìl.la] | villa | ヴィ'ッ.ラ |
| b. | [al.lé:.gro] | allegro | ア.レ.グ.ロ (*アッ.レ'.グ.ロ) |
| | [pit.tsi.ká:.to] | pizzicato | ピ.チ.カ'ー.ト ~ ピッ.チ.カ'ー.ト |

このことは、二重子音の受け入れと、長母音の受け入れとが平行的であることを示唆している。日本語の借用語アクセント規則を満たし、当該音節を重くするという要請により、ともに独自の place 節点を持たない特殊モーラ (二重子音と長母音) が受け入れられていること、反対に、それらの条件から外れた場合は、二重子音・長母音の受け入れは義務的ではないことを示している。このように、音節量全体に関する受け入れ方策と L2/L1 間の音韻構造との關係についての分析、また、他言語との關係について詳細に検討することが今後の課題である。

註

* 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) (課題番号: 26284058)、基盤研究 (C) (課題番号: 16K02629)、および、国立国語研究所研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の助成を受けている。

1 原語強勢開音節が借用語の語末音節に長母音として実現した 1 例として、1 音節語の [pó] (Po): 「ポー」が挙げられる。これは、「1 モーラを避ける」という最小語条件が作用し、2 モーラに伸長 (長母音化) した例と考えられる。

2 原語の語末非強勢開音節が借用語の語末長母音として借用された例として、[brá:vo] (bravo): 「ブラボー」や [spa.gét.ti] (spaghetti): 「スパゲティー」、[gráf.fi.ti] (graffiti): 「グラフフィティー」等がある。これらはすべて、原語の次語末音節の長母音・二重子音が実現されない代わりに、語末が長母音化している。また、ほぼ例外なく「ブラーボ」「スパゲッティ」「グラフフィティ」のような、次語末の長母音・二重子音を実現し語末を短母音で受け入れる型も併存する。隣接する音節の間におけるこのような音節量の調整は興味深い点であり、今後の課題としたい。

3 日本語話者数名に容認度を確認したところ、どの話者にも、ここで述べたような非対称性が確認された。この点についての統計的な調査・検証は今後の課題とする。

4 分析と大きくは関係しないのでタブローには掲載していないが、(16b) と関連して「(ヴェ,ロ')ナ」という候補も想定される。一般に日本語 (東京方言) はフット内の左側が主要部であるため、それが右側にある「(ヴェ,ロ')ナ」のような候補については RHTYPE-T (Trochee: 強弱型) という制約により一貫して排除される。

5 田中 (2008) では、4 モーラ以下の外来語においてのみ、Align-L (Ft, PrWd) を Align-R (Ft, PrWd) と同位置に設定し、それにより、「(デ'ジ) タル」、「(ペ'ガ) サス」ような (軽音節が 4 つ連続し語末が挿入母音 /u/ である) 例を説明している。本稿のイタリア語由来の借用語において、「(ティ'ラ) ミス」(tiramisù) が類似の例として分析可能であるように思われる。しかしながら、イタリア語由来の借用語においては、語末が挿入母音 (そして /u/) の確率が低く、したがって、語末 4 音節目にアクセントの置かれる語は皆無に近い。このような理由により、そして分析の単純化のため、本稿では Align-R (Ft, PrWd) のみを設定する。

参考文献

- 田中真一. 2007. 「イタリア語の重子音と促音形成: 位置と種類に着目して」『日本言語学会第 134 回大会予稿集』252-257.
- 田中真一. 2008. 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京: くろしお出版.
- 田中真一. 2016. 「日本語・イタリア語の借用語における相手言語からの母音長受け入れと音韻構造」『神戸言語学論叢』10, 37-50. 神戸大学大学院人文学研究科言語学研究室.
- 田中真一. 2017. 「パドヴァとヴェローナの韻律構造: イタリア語由来の借用語における音

節量・強勢の受入と音韻構造」田中真一・ピンテール=ガーボル・小川晋史・儀利古幹雄・竹安大 (編)『音韻研究の新展開：窪田晴夫教授還暦記念論文集』342–356. 東京：開拓社.

- Borrelli, Doris. 2002. *Raddoppiamento Sintattico in Italian: A Synchronic and Diachronic Cross-Dialectal Study*. London-New York: Routledge.
- Canepari, Luciano. 1992. *Manuale di Pronuncia Italiana*. Bologna: Zanichelli.
- Dohlus, Katrin. 2005. Phonetics or phonology: Asymmetries in loanword adaptations – French and German mid front rounded vowels in Japanese. *ZAS Papers in Linguistics* 42, 117–135.
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krämer, Martin. 2009. *Phonology of Italian*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubozono, Haruo. 1996. Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211, 71–82.
- Marotta, Giovanna. 1985. *Modelli e Misure Ritmiche: la Durata Vocalica in Italiano*. Bologna: Zanichelli.
- Morimoto, Maho. 2015. Degemination in Japanese loanwords from Italian. Paper presented at GemCon 2015, Glasgow.
- Ooigawa, Tomohiko. 2014. Discrepancies among Japanese loanword adaptations of Italian and Spanish liquids and the perceptions. Paper presented at the Phonology Forum 2014, University of Tokyo.
- Prince, Alan, and Paul Smolensky. 1993/2004. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Shinohara, Shigeko. 2004. Emergence of universal grammar in foreign word adaptations. In R. Kager, J. Pater, and W. Zonneveld (eds.), *Constraints in Phonological Acquisition*, 292–320. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tanaka, Shin'ichi. 2017. The Relation between L2 perception and L1 phonology in Japanese loanwords: An analysis of geminates in loanwords from Italian, in Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*. Oxford: Oxford University Press.
- <コーパス資料>
- 松村明 (編). 1995. 『大辞林』 (第2版) 東京：三省堂.
- 三省堂編修所 (編). 2000. 『コンサイス・カタカナ語辞典』 (第2版) 東京：三省堂.
- 新村出 (編). 1998. 『広辞苑』 (第5版) 東京：岩波書店.